
カードファイトヴァンガード～イメージと絆を繋ぐ物語～

永遠なる自由の剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カードファイトヴァンガード〜イメージと絆を繋ぐ物語〜

【Nコード】

N2376Z

【作者名】

永遠なる自由の剣

【あらすじ】

ヴァンガードの世界に遊戯、十代、遊星、遊馬が迷いこんだ！
ヴァンガードと遊戯王のクロス物語です。

出会いと始まり

そう遠くない未来のお話、カードゲーム人口は数億人を越え今ではカードゲームを専門とした学園まで存在していた。
学園の名前はファイトアカデミア、ヴァンガードを専門とした学校である。

この学園に通う一人の少年がいた。
彼の名前は先導アイチ、櫛という最強のファイターとファイトすることを夢見る少年である。

（今日は良いことが起こりそうな気がする……）

そう思いアイチは教室へと急いだ。

教室に着くといつもメンバーがいた。

「おはようございますお兄さん……」

「おはようカムイ君！」

アイチにカムイと呼ばれたこの少年は葛木カムイ。

「やけに上機嫌じゃない？アイチ」

次に話し掛けて来たのは戸倉ミサキ。

この二人はアイチと同じチーム、Q4のメンバーである。

「なんか今日は良いことが起こりそうな気がする」

「くだらんイメージだな……………」

「權君……………」

アイチたちが話していた場所に一人の青年が現れた。彼の名前は權トシキ、この世界のヴァンガードチャンピオンと双壁とも呼ばれていてアイチたちと同じQ4のメンバーである。

「權のやろー、頭にくるな！」

「カムイ君落ち着いて……………」

怒り狂ったカムイをアイチが止めていると、

ガッシャーン！

校庭の方からすごい音がした。

「な…なんだ！？校庭の方からか！？」

「行ってみよう！」

「待つて、アイチ！」

權を除く3人は校庭を目指して駆けていった。
3人が校庭に着くとそこは土煙が上がっていた。

「ゲホゲホ……………何が起きたんだ？」

「わからないけど気をつけてカムイ君」

「大丈夫ですよお兄さん」

カムイがそういった時、土煙の向こうから人が4人現れた。

「遊星……ここはどこだ？」

「わからない……俺らの世界ではないみたいだな」
遊星と呼ばれたその人が答える。

「な……人が出て来たあ！？」

カムイは驚きアイチの後ろに隠れる。

土煙が晴れてくるとそこにはどこかの制服を着て、首から見たこともないネックレスをしている青年と先ほど遊星と呼ばれたらしきクールだがいびつな髪型をしている青年、何らかの鍵らしきものを首から下げている男の子、赤いブレザーを着ている青年が立っていた。

「貴方方は一体誰ですか………？」

アイチが恐る恐る聞いた。

すると先ほど遊星と呼ばれた青年が答えた。

「俺の名前は不動遊星だ……俺たちは世界が崩壊するとアポリアから告げられ、その未来を代えるためにDホイールに乗って遊戯さん、十代さん、遊馬さんを迎えに時代を越えていたんだ。」

「ちょっと待て……時代を越えて来た？そんなバカな話しあるのか？」

ミサキが質問した。すると、遊星は手袋を外し痣を見せて話した。

「この竜の痣の力で時代を越えられるんだ。そして赤き竜に導かれて来てみたらこんな場所についたんだ」

「そんなことがあるんですか……ところでデュエリストとは何ですか？」

アイチは疑問をぶつけた。すると鍵のようなペンダントをした少年が答えた。

「遊戯王カードで戦う決闘者の事だ！お前ら知らないのかよ！？ほら……」

そついいその少年はデッキケースからカードを取り出したがびっくりした声を上げた。

「俺のデッキが訳のわからないカードになっちまった……」

「な！？」

残りの3人もデッキを確認してみる。すると全員のカードも見たことがないカードになっていた。

「なんだこのカードは……」

「ヴァンガードを知らないのか？」

「……ヴァンガード！？」「……」

4人は驚きの声を上げた。

「ルールを教えてやるよ…」

「權君」

權がいつのまにかアイチの横に立っていた。

「權君戦うの？」

「ああ、あいつらの持っているカードが気になる……………それに話すより簡単にわかりあえる」

權がそういうと見たこともないネックレスをした青年が答えた。

「面白そうだな、四の五の言うより分かりやすい……………良いぜデュエルだ」

「僕も戦ってみたい！」

「私も興味がわいた。私も戦いたい」

「俺様もだ」

アイチ、ミサキ、カムイも戦いたいと言った。

「こっちも4人だしちょうどいい、よろしく頼む」

こうしてアイチたちQ4と遊星ら4人によってファイトをすることになったのだった。

出合いと始まり（後書き）

次回は遊戯VS櫛君です
最強同士の戦いです

最強VS最強 前編

30分後、遊星たちはデッキを見て個々の能力を覚えた。そして權と見たこともないネックレスをした青年とのファイトが始まるうとしていた。

「俺の名前は武藤遊戯…さあ！面白い勝負をしようぜ！」

「俺の名前は權トシキだ……お前は初心者だから説明しながら戦ってやるよ！」

お互いに自己紹介をし握手をしてファイトを始めようとしていた。

「よし！始めるぞ！イメージしろ……今の俺たち二人は地球によく似た惑星『クレイ』に現れた霊体だ…このか弱い存在の俺たちに与えられた能力がふたつある……ひとつは『コール』！この惑星の住人やモンスターたちを呼び寄せる能力だ！俺たちが呼び寄せる事ができるのは契約したものたち……」

そう言い權はデッキを手に持ち話を続けた。

「お互いのデッキに集められたカードたちだけだ！」
そして權はデッキを置いた。

「そしてふたつめは霊体である自分呼び寄せたモンスターらに憑依させる能力！『ライド』！！そしてライドした俺たちを先導者…『ヴァンガード』と呼ぶ！まずはグレード0のカードを1枚選ん

でそれを場に伏せな！」

櫛はデッキからカードを1枚選んで伏せた。遊戯も同じく1枚選び置いた。

「最初の俺たちが最初にライドできるのはこのグレード0だけだ」

「なるほどな」

「この伏せたカードが開かれたらそれは他の誰でもない自分自身となる！自らがヴァンガードとなって契約したものを率いて戦うんだ！さあシャッフルしたデッキからカードを5枚引きな、それが俺たちが呼び寄せる準備の整ったものたちだ」

櫛はシャッフルしたデッキからカードを引きながら言う。
遊戯も同じく引く。

「よし！同時にこのファーストヴァンガードを開いたらゲームスタートだ！行くぞ！」

「来な！」

櫛と遊戯は伏せたファーストヴァンガードを開きながら同時にこういう

「「スタンドアップヴァンガード！！」」

「俺はアンバードラゴン暁にライド！」

「俺は見習いの黒魔術師にライド！」

「これでお互いヴァンガードとして惑星クレイの地に立った！先ず

は俺の先攻だ！カードを1枚引く！」

そう言い權はカードをデッキから引いた。

「自分のターンには1度だけヴァンガードを更なる上級グレードにライドする事ができる…『ライドフェイズ』がある！」

權は手札からカードを1枚選び、ファーストヴァンガードの上に置いた。

「俺はこのカードにライドする！！ライド・ザ・ヴァンガード！！グレード1、アンバードラゴン^{デイライト}白日だ！そしてアンバードラゴン^{ドーン}暁のスキルを発動する！デイライトがドーンにライドしたとき、デッキからアンバードラゴン^{ダスク}黄昏を1枚手札に加えデッキをシャッフルする事ができる…そしてアンバードラゴンデイライトのスキル！ソウルにアンバードラゴンドーンが有るならヴァンガード時だけだがこのユニットのパワーを+2000！」

元々のパワーが6000だったデイライトは8000となる。

「さらにヴァンガードは自身のグレード以下のカードをコールして従える事ができる…このカードを『リアガード』と呼ぶ！」

權はヴァンガードの後ろにカードを置いた。

「コール・ザ・リアガード！！グレード1のアンバードラゴンデイライト！！さらにデイライトのスキル！デイライトがリアガードにコールされたとき、手札のグレード3を捨てデッキからアンバードラゴン^{イクリプス}蝕を手札に呼べる！」

權はデッキからアンバードラゴンイクリプスを手札に加えた。

「これで俺の自陣には2体！アタック……は先攻した最初のターンはできない、ここで俺のターンを終了する」

「俺のターン！」

遊戯はデッキからカードを引いた。

「俺はこのカードにライドするぜ！ライド・ザ・ヴァンガード！！ブラックマジックカーテン！」

遊戯も見習いの黒魔術師の上にカードを置いた。

「見習いの黒魔術師のスキル！ブラックマジックカーテンがこのユニットにライドしたときデッキからブラックマジシャンを手札に加える！そしてブラックマジックカーテンのスキル！ソウルに見習いの黒魔術師が有るときパワー+2000だ！」

ブラックマジックカーテンの攻撃力も6000なので權のアンバードラゴンデイルイトと同じ攻撃力となった。

「さらにコール・ザ・リアガード！！ブラックマジックカーテン！このカードは權のデイルイトと同じようなスキルを持つ……」

「何だと？」

「手札のグレード3を捨てデッキからカオスマジシャンズドラゴンを手札に加える！」

遊戯も權と同じくデッキからカードを手札に加えた。
それを見ていたアイチが

「凄い……遊戯さん初めてなのにもうデッキを使いこなしてる……」

「当たり前だろ？遊戯さんは俺らの世界の初代デュエルチャンピオンなんだから！」

「君は？」

「俺の名前は遊城十代、よろしく」

十代と名乗った少年が握手を求めてきた。

「はじめまして！僕の名前は先導アイチです。遊戯さんってそんなに強い方だったんですね！」

アイチは十代と握手をし、率直な感想を述べた。

「もちろん！あの人はどんな強敵にも屈指ず戦い抜いてきた凄い人なんだぜ！」

アイチは十代の話を聞いて思う。（今の話が本当なら權君が満足して戦える相手だね）と。

「まさか同じ能力対決になるとはな……2体でアタックされたら俺は齒が立たない……お前の方が圧倒的に有利だが……アタックするかい？」

「おうー!!」

「よし良いぜ！攻撃するユニットをレストし宣言しな！」

遊戯はユニットをレストしながら宣言する。

「リアガードのブラックマジックカーテンでヴァンガードをブースト！！ブラックマジックカーテンでアタック！！」

遊戯の攻撃が權にヒットした。

「やられたよ……お前のアタックは置いたにヒットした！ヴァンガードがアタックするとき、デッキの一番上を確認して手札に加える事ができる……そして確認したカードがトリガーユニットだった場合、そのトリガーの力を自陣のユニットに与える事ができる！さらにヴァンガードに攻撃がヒットするとデッキのカードが1枚……契約が解除され言てヴァンガードの元から去っていく！まるで危険を感じて逃げ出したようだな……アタックされてめくったカードがトリガーユニットの場合でもそのトリガーの力を使うことができる！そして……契約を解除されたものが6体を越えたとき……すべてのカードとの契約は解除され俺たちは霊体に戻り消滅する。つまりそのプレイヤーの負けだ……理解できたな？授業は終わりだ！行くぞ！」

「来な！」

ここから權と遊戯の本当の戦いが始まるのだった。

最強VS最強後編

「マイターン、ドロー…俺はアンバードラゴンダスクにライドする！アンバードラゴンダスクのスキル！ソウルにアンバードラゴンデイルイトが有るときパワー+1000だ！」

アンバードラゴンダスクのパワーが10000となった。さらに權は「ラーヴァアームドラゴン、フレイムエッジドラゴンをコール！そしてフレイムエッジドラゴンでヴァンガードをアタック！」

「ノーガード、ダメージトリガーチェック……ゲット！ドロトリガー！ヴァンガードにパワー+5000、そしてドロ！」

「フレイムエッジドラゴンのスキル！このユニットのアタックがヒットしたときソウルチャージできる！ソウルをチャージし、次だ！アンバードラゴンデイルイトのブースト！アンバードラゴンダスクでヴァンガードをアタック！ダスクのスキル！ダスクがヴァンガードをアタックするとき、パワー+2000される！」

ダスクはデイルイトのブーストと自身のスキルでトータルパワー18000となる。

「ノーガードだ！」

權のアタックがヒットし、カードが1枚ダメージゾーンに送られた。

「ドライブトリガーチェック……トリガー無しだ…ターンを終了する」

まだユニットが残っていたがパワーが足りずアタックできなかった。
そして遊戯のターンになる。

「俺のターン！強いな君は！こんなに熱くなれた戦いは久しぶりだぜ！さあ、俺も本気で行くぜ！俺の最強の僕！ライド！ブラックマジシャン！さらにコール！ブラックマジシャンガール！ブラックマジシャンのスキル！カウンターブラスト」

そういつて遊戯はダメージゾーンのカードを2枚裏返す。

「ソウルに見習いの黒魔術師、ブラックマジックカーテンが有るとき相手のリアガードを2体退却させる！ブラックマジック！！」

櫓の場のラーヴァアームドラゴン、フレイムエッジドラゴンが退却させられた。

（なかなかやるな。しかもまだなにか隠し持ってるな）

「さらに行くぜ！リアガードのブラックマジシャンガール、ブラックマジックカーテンをソウルに異動することでこのカードはスペリオルライドできる！俺の新たな仲間！カオスマジシャンズドラゴンにスペリオルライド！」

「ほう？なかなか面白いな！それでこそ燃える！お前の本気を見せてみる！」

「カオスマジシャンズドラゴンのスキル！このカードはソウルにブラックマジシャン、ブラックマジシャンガール、ブラックマジックカーテンが有るときカオスマジシャンズドラゴンのパワー+2000だ」

ももとのパワーは10000なので12000となる。

「さらに手札を1枚捨てデッキからグレード2以下のマジシャンユニットをコールできる！俺はデッキからカオスマジシャンをコールする！！カオスマジシャンはカオスマジシャンズドラゴンが有るときパワー+2000だ！」

カオスマジシャンのパワーも10000であるためパワーは12000となる。

「だがカオスマジシャンはカオスマジシャンズドラゴンがいないとパワー-5000だ！そしてカオスマジシャンでアタック！！！」

「ガーディアンコール！ブレイジングコアドラゴンをコール」

「アタックが通らないだ！？」

遊戯は驚きの声を上げた。

「自分の手札から一度だけユニットをコールしてヴァンガードを守る事ができる！ガーディアンとしてコールされたユニットはクローズステップ時にドロップゾーンに送られる」

「やっぱり櫛君はそこでガーディアンを教えるんだね…」
アイチが自分の時の事を思いだし呟いた。

「実戦の方が分かりやすいだろ…」

「確かにな…ならガーディアンのガード力を越えるパワーでアタックすればいいんだろ！カオスマジシャンズドラゴンでヴァンガード

をアタック！！ツインドライブ、ファースト：ゲットクリティカルトリガー！セカンド：スタンドトリガーだ！パワーをカオスマジシヤンズドラゴンとカオスマジシヤンに、そしてカオスマジシヤンズドラゴンにクリティカル＋１だ！」

アタックはヒットし櫂のデッキからカードが2枚ダメージゾーンに置かれた。

「さらにカオスマジシヤンでアタック！！」

「ノーガードだ…」

これで櫂のダメージは4となった。

「これで俺のターンは終了だ」

「マイターン、スタンドアンドロー！俺はアンバードラゴンイクリプスにライド！イクリプスのスキル！ソウルにアンバードラゴンダスクが有るときパワー＋1000だ！」

イクリプスのパワーが11000になる。

「さらにドラゴニックオーバーロード、デュアルアクスアークドラゴン、バーをコール！ドラゴニックオーバーロードのカウンターブラスト！オーバーロードにパワー＋5000だ！」

櫂は一気に攻撃を仕掛けた。

「オーバーロードでカオスマジシヤンにアタック！！エターナルフレーム！！」

「ノーガード」

オーバーロードの攻撃がヒットしオーバーロードがスタンドした。

「な……シリーズアタック!? クソ」

「再度オーバーロードでアタック! エターナルフレイム!!」

「エポナでガードする!!」

オーバーロードの攻撃は防がれてしまった。だが權の攻撃は止まらない。

「アンバードラゴンデイルイトのブースト!! アンバードラゴンイクリプスでアタック!!」

「ガードはしない」

「ツインドライブ、ファースト……」

1枚目にはトリガーはなかった。

「セカンド……ゲットクリティカルトリガー! イクリプスにクリティカル+1、アクスにパワーを与える!!」

遊戲のダメージゾーンにカードが2枚送られた。

「バーのブースト!! アクスでアタック!! アクスのスキル、相手

リアガードが2体以下のときパワー+3000だ！」

アクスのトータルパワーが26000となる。

「高過ぎる！ノーガードだ」

遊戯のダメージが5となった。

「あと1ダメージだな……俺のターンは終了する」

「俺のターンだ！カオスマジシャンズドラゴンの最後のスキル！カウンターブラスト！」

ダメージを3枚裏返した。

「パワー+10000、クリティカル+1だ！だがこのスキルはソウルにブラックマジシャン、ブラックマジシャンガール、ブラックマジックカーテンがありダメージが4以上ではないと使えないが十分だ！さらにブラックマジシャン、ブラックマジックカーテンをコール！そしてアタック！！カオスマジシャンズドラゴンでアタック！！！」

このアタックがヒットすると櫓は敗けてしまうのに櫓は焦らなかった。

「バリィで完全防御だ……」

「ヒットしないだ！？ツインドライブ…ファースト…セカンド、ゲットクリティカルトリガー！効果はすべてブラックマジシャンへ！」

ツインドライブで引いた1枚目はグレード3だった。
クリティカルトリガーの能力でブラックマジシャンの攻撃力は14000となった。

「ブラックマジックカーテンのブースト!! ブラックマジシャンでアタック!!」

「ラクシャでガードだ!!」

「ターン終了だ!!」

遊戯はこのターンで權を倒せなかった。そして遊戯はもう次のターンは来ないと悟った。

「ファイナルターン!!」

「何!?!」

ファイトを見ていた十代は驚きの声を上げ、アイチたちは遂にかと思った。

「ブレイジングフレアドラゴンにライド!そしてジョカをコール!そしてブレイジングフレアドラゴンのソウルブラスト!相手ユニットを1体退却させる!!」

遊戯の場のブラックマジシャンが姿を消した。

「そしてジョカ、ブレイジングフレアドラゴンのスキル!相手ユニットが退却したときパワー+3000だ!!」

「何だと!?!」

「ドラゴニックオーバーロードのアタック！」

アタックがヒットしダメージチェックに入る。

「ゲット、スタンドトリガーだ！パワーをヴァンガードに、ブラックマジックカーテンをスタンド」

「アンバードラゴンデイルライトのブースト！！ブレイジングフレアドラゴンでアタック！！」

「ブラックマジックカーテン、エポナでガード！これで防げるはずだ！」

「ツインドライブ、ファースト…！ゲットドロトリガー！セカンド…！ゲットクリティカルトリガー！効果のすべてはアクスに！そして1毎夜ドロ…！そしてデュアルアクスアークドラゴンでアタック！！」

もう遊戯にはガードできるカードがなかった。

「ノーガード…！」

「双斧に刻まれし恐怖、絶望……永の苦痛に悶えて眠れ！！デュアルアクスボンバー！！」

デュアルアクスのアタックがヒットし、遊戯のダメージが7となり遊戯は權に敗北してしまったのだった。

「久しぶりに面白いファイトだったぜ……遊戯、ルームをしっかり

覚えたらお前は今よりもっと強くなる…その時が楽しみだ」

「もちろん絶対に強くなってやる！そして權、君と戦い必ず勝ってみせる！」

そっぴいお互いに握手をした。

「あの遊戯さんに勝つ何てあいつは一体何者何だ！？それにしてもすごかったな！今を見たら俺もやりたくなっちゃったぜ！なあアイチ、俺とファイトしよう！」

十代が興奮しきってアイチにそう告げた。
アイチは戸惑ったが

「もちろんだよ！さあファイトしよう！」

そっぴって二人は權と遊戯が戦った場所へと移動するのだった。

そして場所に着きデッキを置いて叫んだ。

「「スタンドアップヴァンガード！！」」

最強VS最強後編

「マイターン、ドロー…俺はアンバードラゴンダスクにライドする！アンバードラゴンダスクのスキル！ソウルにアンバードラゴンデイルイトが有るときパワー+1000だ！」

アンバードラゴンダスクのパワーが10000となった。さらに權は「ラーヴァアームドラゴン、フレイムエッジドラゴンをコール！そしてフレイムエッジドラゴンでヴァンガードをアタック！」

「ノーガード、ダメージトリガーチェック……ゲット！ドロトリガー！ヴァンガードにパワー+5000、そしてドロ！」

「フレイムエッジドラゴンのスキル！このユニットのアタックがヒットしたときソウルチャージできる！ソウルをチャージし、次だ！アンバードラゴンデイルイトのブースト！アンバードラゴンダスクでヴァンガードをアタック！ダスクのスキル！ダスクがヴァンガードをアタックするとき、パワー+2000される！」

ダスクはデイルイトのブーストと自身のスキルでトータルパワー18000となる。

「ノーガードだ！」

權のアタックがヒットし、カードが1枚ダメージゾーンに送られた。

「ドライブトリガーチェック……トリガー無しだ…ターンを終了する」

まだユニットが残っていたがパワーが足りずアタックできなかった。
そして遊戯のターンになる。

「俺のターン！強いな君は！こんなに熱くなれた戦いは久しぶりだぜ！さあ、俺も本気で行くぜ！俺の最強の僕！ライド！ブラックマジシャン！さらにコール！ブラックマジシャンガール！ブラックマジシャンのスキル！カウンターブラスト」

そういつて遊戯はダメージゾーンのカードを2枚裏返す。

「ソウルに見習いの黒魔術師、ブラックマジックカーテンが有るとき相手のリアガードを2体退却させる！ブラックマジック！！」

櫓の場のラーヴァアームドラゴン、フレイムエッジドラゴンが退却させられた。

（なかなかやるな。しかもまだなにか隠し持ってるな）

「さらに行くぜ！リアガードのブラックマジシャンガール、ブラックマジックカーテンをソウルに異動することでこのカードはスペリオルライドできる！俺の新たな仲間！カオスマジシャンズドラゴンにスペリオルライド！」

「ほう？なかなか面白いな！それでこそ燃える！お前の本気を見せてみる！」

「カオスマジシャンズドラゴンのスキル！このカードはソウルにブラックマジシャン、ブラックマジシャンガール、ブラックマジックカーテンが有るときカオスマジシャンズドラゴンのパワー+2000だ」

ももとのパワーは10000なので12000となる。

「さらに手札を1枚捨てデッキからグレード2以下のマジシャンユニットをコールできる！俺はデッキからカオスマジシャンをコールする！！カオスマジシャンはカオスマジシャンズドラゴンが有るときパワー+2000だ！」

カオスマジシャンのパワーも10000であるためパワーは12000となる。

「だがカオスマジシャンはカオスマジシャンズドラゴンがいないとパワー-5000だ！そしてカオスマジシャンでアタック！！」

「ガーディアンコール！ブレイジングコアドラゴンをコール」

「アタックが通らないだ！？」

遊戯は驚きの声を上げた。

「自分の手札から一度だけユニットをコールしてヴァンガードを守る事ができる！ガーディアンとしてコールされたユニットはクローズステップ時にドロップゾーンに送られる」

「やっぱり櫛君はそこでガーディアンを教えるんだね…」
アイチが自分の時の事を思いだし呟いた。

「実戦の方が分かりやすいだろ…」

「確かにな…ならガーディアンのガード力を越えるパワーでアタックすればいいんだろ！カオスマジシャンズドラゴンでヴァンガード

をアタック！！ツインドライブ、ファースト：ゲットクリティカルトリガー！セカンド：スタンドトリガーだ！パワーをカオスマジシヤンズドラゴンとカオスマジシヤンに、そしてカオスマジシヤンズドラゴンにクリティカル＋１だ！」

アタックはヒットし櫂のデッキからカードが2枚ダメージゾーンに置かれた。

「さらにカオスマジシヤンでアタック！！」

「ノーガードだ…」

これで櫂のダメージは4となった。

「これで俺のターンは終了だ」

「マイターン、スタンドアンドロー！俺はアンバードラゴンイクリプスにライド！イクリプスのスキル！ソウルにアンバードラゴンダスクが有るときパワー＋1000だ！」

イクリプスのパワーが11000になる。

「さらにドラゴニックオーバーロード、デュアルアクスアークドラゴン、バーをコール！ドラゴニックオーバーロードのカウンターブラスト！オーバーロードにパワー＋5000だ！」

櫂は一気に攻撃を仕掛けた。

「オーバーロードでカオスマジシヤンにアタック！！エターナルフレーム！！」

「ノーガード」

オーバーロードの攻撃がヒットしオーバーロードがスタンドした。

「な……シリーズアタック!? クソ」

「再度オーバーロードでアタック! エターナルフレイム!!」

「エポナでガードする!!」

オーバーロードの攻撃は防がれてしまった。だが櫂の攻撃は止まらない。

「アンバードラゴンデイルイトのブースト!! アンバードラゴンイクリプスでアタック!!」

「ガードはしない」

「ツインドライブ、ファースト……」

1枚目にはトリガーはなかった。

「セカンド……ゲットクリティカルトリガー! イクリプスにクリティカル+1、アクスにパワーを与える!!」

遊戲のダメージゾーンにカードが2枚送られた。

「バーのブースト!! アクスでアタック!! アクスのスキル、相手

リアガードが2体以下のときパワー+3000だ！」

アクスのトータルパワーが26000となる。

「高過ぎる！ノーガードだ」

遊戯のダメージが5となった。

「あと1ダメージだな……俺のターンは終了する」

「俺のターンだ！カオスマジシャンズドラゴンの最後のスキル！カウンターブラスト！」

ダメージを3枚裏返した。

「パワー+10000、クリティカル+1だ！だがこのスキルはソウルにブラックマジシャン、ブラックマジシャンガール、ブラックマジックカーテンがありダメージが4以上ではないと使えないが十分だ！さらにブラックマジシャン、ブラックマジックカーテンをコール！そしてアタック！！カオスマジシャンズドラゴンでアタック！！！」

このアタックがヒットすると權は敗けてしまうのに權は焦らなかった。

「バリィで完全防御だ……」

「ヒットしないだ！？ツインドライブ…ファースト…セカンド、ゲットクリティカルトリガー！効果はすべてブラックマジシャンへ！」

ツインドライブで引いた1枚目はグレード3だった。
クリティカルトリガーの能力でブラックマジシャンの攻撃力は14000となった。

「ブラックマジックカーテンのブースト!! ブラックマジシャンでアタック!!」

「ラクシャでガードだ!!」

「ターン終了だ!!」

遊戯はこのターンで權を倒せなかった。そして遊戯はもう次のターンは来ないと悟った。

「ファイナルターン!!」

「何!?!」

ファイトを見ていた十代は驚きの声を上げ、アイチたちは遂にかと思った。

「ブレイジングフレアドラゴンにライド!そしてジョカをコール!そしてブレイジングフレアドラゴンのソウルブラスト!相手ユニットを1体退却させる!!」

遊戯の場のブラックマジシャンが姿を消した。

「そしてジョカ、ブレイジングフレアドラゴンのスキル!相手ユニットが退却したときパワー+3000だ!!」

「何だと!?!」

「ドラゴニックオーバーロードのアタック！」

アタックがヒットしダメージチェックに入る。

「ゲット、スタンドトリガーだ！パワーをヴァンガードに、ブラックマジックカーテンをスタンド」

「アンバードラゴンデイルライトのブースト！！ブレイジングフレアドラゴンでアタック！！」

「ブラックマジックカーテン、エポナでガード！これで防げるはずだ！」

「ツインドライブ、ファースト…！ゲットドロトリガー！セカンド…！ゲットクリティカルトリガー！効果のすべてはアクスに！そして1毎夜ドロ…！そしてデュアルアクスアークドラゴンでアタック！！」

もう遊戯にはガードできるカードがなかった。

「ノーガード…！」

「双斧に刻まれし恐怖、絶望……永の苦痛に悶えて眠れ！！デュアルアクスボンバー！！」

デュアルアクスのアタックがヒットし、遊戯のダメージが7となり遊戯は權に敗北してしまったのだった。

「久しぶりに面白いファイトだったぜ……遊戯、ルームをしっかり

覚えたらお前は今よりもっと強くなる…その時が楽しみだ」

「もちろん絶対に強くなってやる！そして權、君と戦い必ず勝ってみせる！」

そっぴいお互いに握手をした。

「あの遊戯さんに勝つ何てあいつは一体何者何だ！？それにしてもすごかったな！今を見たら俺もやりたくなっちゃったぜ！なあアイチ、俺とファイトしよう！」

十代が興奮しきってアイチにそう告げた。
アイチは戸惑ったが

「もちろんだよ！さあファイトしよう！」

そっぴって二人は權と遊戯が戦った場所へと移動するのだった。

そして場所に着きデッキを置いて叫んだ。

「「スタンドアップヴァンガード！！」」

HERO VS 光の騎士団（前書き）

EI HERO がチートです（笑）

HERO VS 光の騎士団

十代とアイチのファイトが始まった。

「ばーくがるにライドします」

「俺はハネクリボーにライドするぜ！よろしくな、ハネクリボー！」

（クリクリー）

十代の問いかけにまるでハネクリボーが答えているように思えた。

その光景を見ていた櫛は驚く。

（まさかアイツもあの力を？……………まさかな）

「僕の先攻です。ドロー！僕はマロンにライドします！そしてばーくがるのスキル！」

ソウルにあつたばーくがるがリアガードサークルにコールされる。

「ばーくがるは他のロイヤルパラディンがライドしたとき、リアガードサークルにコールされます。ターンエンドです」

「よし！俺のターンだな。ワクワクが止まらないぜ！行くぜ！俺はEーHERO フェザーマンにライド！そしてハネクリボーのスキルだ！ハネクリボーはEーHERO にライドされたとき、手札に戻す事ができる！」

「そんなスキル聞いたことないぞ!？」

Q4のメンバーは驚いた。

無理もない、今までにライドされたカードが手札に戻るカードなど存在していないのだから。

「後衛にEーHERO バーストレディをコール!そしてブースト!ー!フェザーマンでアタック!」

フェザーマンとバーストレディの攻撃力は7000なので合計14000となる。

「ドライブチェック!トリガーはないぜ」

「ダメージチェックです……」

アイチは1ダメージ食らった。

「僕のターン!僕はふろうがるをコール!」

ピンク色の可愛いハイドックがコールされた。

「さらにばーくがるのスキル!デッキから未来の騎士リユーをコールします。そしてリユーのカウンターブラスト!」

アイチはばーくがる、リユー、ふろうがるをソウルに送る。そしてアイチは高らかに宣言する。

「立ち上かれ!僕の分身!ブラスタブレード!」

ロイヤルパラディン光の剣、ブラスタブレードが姿を現す。

その姿は凜々しく、十代のHEROを圧倒するプレッシャーを放っていた。

「すげえ、すげえよ！アイチ！カッコいいぜ！」

十代は初めて見るブラスターブレードに感動していた。

「ブラスターブレードの後衛にういんがるをコール！」

ブラスターブレードの相棒、ういんがるがコールされる。

「ういんがるのブースト！！ブラスターブレードでアタック！さら
にういんがるのスキル、ういんがるはブラスターブレードをブース
トしたとき、ブラスターブレードにパワー+4000します！」

これでトータルパワーは19000となる。

「ノーガードだ！」

「ドライブチェック！トリガーはなし……」

「俺のターン！アイチがカッコいいのを見せてくれたからな 俺も見
せてやるよ！EーHEROバブルマンにライド！そしてバブルマン
のスキル！カウンターブラスト1だ！手札からカードを2枚捨てデ
ツキからカードを2枚ドロ！」

「手札増強……」

「そして俺はドロップゾーンに送られたネクロダークマンのスキル

を発動！ネクロダークマンがドロップゾーンにあるとき1度だけグレード3にスペリオルライドできる！」

「………！？」「………」

このスキルにはさすがに全員驚いた。
ほとんどノーコストでグレード3になれるのだから。

「だがネクロダークマンはデッキに1枚しか入れられず、しかも1度しか使用出来ないけどな……これが俺のフェイバリットカードだぜ！こい！EーHEROネオス！！」

ネオスは十代が数々の敵と戦ったときに十代と共に戦い抜いた十代の切り札。

「手札からNーグランモールをコール！そしてグランモールをソウルに送り、コンタクトフュージョン！！俺はエクストラデッキより、EーHEROグランネオスにユニゾンライド！！」

「な！？」

「わりいわりい……お前らの世界にはないんだよな、こういうの」

そういうと十代は説明してくれた。

「俺のユニゾンライドっていうのはユニゾンユニットのライド条件をクリアしたときにエクストラデッキ、まあ今あるデッキ以外のデッキだ……そこからスペリオルライドできるんだ！俺はユニゾンライドの2つの方法の内の1つ、コンタクトフュージョンを今やったんだ」

「十代は融合の使い手だからな」

遊戲がみんなに話す、十代は元の世界で融合という力で何度もピンチを切り抜けたと。

「俺のはユニゾンだけど遊星と遊馬も、もちろん遊戲さんも方法は違うけど俺と同じことが出来るんだぜ！」

Q4のメンバーには驚きの連発である。

自分たちにもこの力が使えたら無敗に近いだろう。

そして權は考える

（こいつら全員と戦いたい！）と。

「アイチ！ここからが本番だぜ！EーHEROグランネオスのスキル！相手ユニットを1体デッキに戻す！ういんがるをデッキへ！」

「くっ！！」

（強い！權君と同じくらい強い！けど勝ちたい！）

「バーストレディのブースト！！グランネオスでアタック！！」

「ノーガードです」

「ツインドライブ！ファースト！セカンド！ゲットヒールトリガー！ダメージを回復してパワーをグランネオスに」

アイチのダメージが2となるが、十代のダメージは0、圧倒的にア

イチが不利である。

「ターンの終わりにグランネオスはエクストラデッキに戻り、ソウルのネオスにライドし、グランモールはデッキに戻る……ターンエンド！」

グランネオスの姿が消え、ネオスに戻る。

どうやらコンタクトフュージョンは1ターンしか持たないようだ。

「僕のターン！降臨せよ、騎達の主！ライド！！騎士王アルフレッド！！！」

アイチの切り札にして騎士達の王、アルフレッドが姿を現す。

「ギャラティン、ぱーんがる、まあがるをコール！そしてぼーんがるのスキル！カウンターブラスト！デッキからソウルセイバードラゴンを手札に加えます。そしてソウルセイバードラゴンをコール！」

「お兄さんソウルセイバーをどうしてリアガードなんかに！」

「次にライドしてもリアガードが足りないから……アタッカーを増やすためにコールしたんだろう」

櫛が解説をしてくれた。

「ソウルセイバードラゴンでネオスをアタック！」

「ノーガードだ！」

ダメージチェックにトリガーはなし。

「アルフレッド！！アルフレッドはリアガードのロイヤルパラディンの数×2000がパワーに加算されます！」

よって今のアルフレッドはパワー16000である。

「ノーガード」

「ツインドライブ！ファースト！セカンド！ゲットクリティカルトリガー！クリティカルはアルフレッドへ！パワーはギャラティン！」

さらに十代に2ダメージが追加された。

「ギャラティン！」

「ノーガード」

これで十代のダメージは5、次を受けたら敗けである。

「おもしれえよアイチ！俺も答える！俺のターン！Nーエアハミングバードをコール！そしてコンタクトフュージョン！！」

先程同様、エアハミングバードがソウルに置かれ、エクストラデッキから

「EーHEROエアーネオスにユニゾンライド！！エアーネオスは相手とのダメージの差×2000パワーアップだ！そしてエアーネオスでアタック！！」

「防ぎ切れない！」

「ツインドライブ！ファースト！ゲットクリティカルトリガー！セカンド！ゲットクリティカルトリガー！パワーは全てエアーネオスに」

これでアイチのダメージも5になった。

またエアーネオスはデッキに戻り、ネオスだけが場に残った。

「このターンで決めます！」

「受けて立つぜ！」

「マロンをソウルセイバーの後衛にコール！そしてアルフレッドのカウンターブラスト！デッキからゼノンにコール！」

ゼノンはデッキの1番上を巡り、それがヴァンガードと同じグレードならスペリオルライドできる！！」

アイチは祈るようにデッキをめくる。

そして……

「聖なる竜よ、出でてその神秘的な力を奮え！ソウルセイバードラゴンにスペリオルライド！！そしてソウルブラスト！ソウルセイバードラゴン、ギャラティン、ゼノンにパワー+5000！！」

「アイチ！お前は本当にすごいよ！」

「これが僕の全開です。ギャラティンでアタック！！」

「悪いなアイチ！俺は敗けない。来い！相棒、ハネクリボーでガードー！ハネクリボーのスキル！ガーディアンにコールされたとき、カウンターブラスト3と手札のEーHEROを2体捨てることで俺のヴァンガードはこのターンダメージを受けない！！」

「そ……そんな……」

「あと少しだったな」

結局ツインドライブでトリガーはなかった。

「俺のターン！手札のNーフレアスカラベ、Nーグランモールをコール！そしてコンタクトフュージョン！！EーHEROマグマネオス！！マグマネオスはお互いのソウルのカード1枚につきパワー＋1000だ！」

アイチのソウルは1だが十代は5枚、よって6000パワーが上がり、もともとは11000なので17000になり、バーストレデイのブーストで24000。アイチは防ぎきれずダメージチェックに入る。

「トリガーなし……僕の負けです……」

「そんな落ち込むなよアイチ！お前はもっともっと強くなる。強くなった姿を俺に見せてくれよ？」

「はいっ！！」

「ガッチャ！楽しいファイトだったぜ！」

十代とアイチのファイトは十代の勝利で終わるのだった。

HERO VS 光の騎士団（後書き）

次回はミサキVS遊星で行きたいと思います

星の絆VS占術魔法団

アイチと十代のファイトが終わり、次は遊星とミサキの番なのでお互いにデッキをシャッフルしていた。

「俺の名前は不動遊星だ…デッキはほしくずというクランを使っている」

「私は戸倉ミサキ、ほしくず何て聞いたことないな……まあ前の二人みたいに強いんだろうけどね」

遊星とミサキは簡単な自己紹介をしてデッキからカードを1枚裏向きに置いて叫んだ。

「「スタンドアップ！ヴァンガード！！」」

「俺はスターライトロードにライド！」

「私は神鷹一拍子にライド！！」

（スターライトロード……一体どんなスキルを持っているんだろう。あんなドラゴン見たことない）

遊星がライドしたユニットは白い体に白い羽を携えて体にはまさに星屑を纏っているドラゴンだった。

「スターダストによく似てるぜ」

十代がスターライトロードをみていった。

「相手が何であれ、全力で行くよ！私のターン！ドロー、神鷹一拍

子のスキル！デッキの上からカードを5枚めくり、その中に三日月の女神ツクヨミがあればライドできる……」

ミサキはデッキの上から5枚めくりその中の1枚を手に取り叫ぶ。

「三日月の女神ツクヨミにライド！！そしてターン終了」

「俺のターン！俺はスピードウォリアーにライド、そしてスターライトロードのスキル！他のほしくずがこのユニットにライドしたとき、このユニットを手札に戻す！そしてスピードウォリアーのスキル！スピードウォリアーが場に出たターンの終了時までスピードウォリアーの攻撃力は倍になる！」

スピードウォリアーのパワーは7000なので14000となる。

「スピードウォリアーでツクヨミをアタック！」

「ノーガード」

「ドライブチェック、ゲットドロトリガー！パワーをスピードウォリアーに、そして1枚ドロ！」

ミサキに1ダメージを与え遊星はカードを1枚引く。

「ターンエンド」

（こいつやっぱり強い！）

「私のターン！三日月の女神ツクヨミのスキル！デッキの上からカードを5枚めくりその中の半月の女神ツクヨミにライドできる……！」

上からカードをめくり、その中のカードを手に取り微笑む。

「時の流れは止められない、月は必ず満ちていくもの！ライド、半月の女神ツクヨミ！そしてツクヨミのスキル！ソウルに神鷹一拍子、三日月の女神ツクヨミがあるときソウルチャージできる」

デッキの上のカードを2枚半月の女神ツクヨミの下に置いた。

「そしてレッドアイをコールしてレッドアイでアタック！」

遊星のダメージゾーンにカードが1枚送られる。

「そしてツクヨミでアタック！」

「受けてやる！」

「ドライブチェック、トリガーなし…ターン終了」

遊星のダメージが2となった。

「俺のターン！俺はスタードライブドラゴンにライド！！そしてチューナーユニット、ジャンクシンクロン、チューニングサポーターをコール！！」

「やるのか遊星！」

「やります遊戯さん！俺はジャンクシンクロンのスキルを発動！！ジャンクシンクロンと星屑のユニット1体をソウルに送る！」

ジャンクシンクロンの姿が消え光の輪となる。

「ジャンクシンクロンはジャンクシンクロンとほしくずのユニット
1体をソウルに送り、エクストラデッキのジャンクと名のつくユニ
ットをコールまたはライドできる!!」

「な...!？」

「集いし星が新たな力を呼び覚ます!光さす道となれ!!現れる、
ジャンクウォリアー!!」

遊星のリアガードに紫色の戦士が現れた。

「これが俺の絆の力、シンクロユニットだ!そしてジャンクウォリ
アーのスキル、ソウルのジャンクと名のつくユニット1体につきパ
ワー+1000だ!」

ジャンクウォリアーのパワーは10000、ソウルのジャンクは1
体なのでパワーは11000となる。

「さらにチューニングサポーターのスキル!チューニングサポータ
ーがシンクロの素材となったとき、デッキからカードを1枚引く。
ジャンクウォリアーでレッドアイをアタック!!スクラップフィス
ト!!」

「くっ!!」

「スタードラゴンゴンのスキル!スタードラゴンゴンのア
タックするときパワー+2000だ!そしてアタック!」

「Eアラマーでガード!」

「ドライブチェック、ゲットスタンドトリガー！ジャンクウォリアーをスタンド！さらにパワー＋、そしてアタックだ！スクラップフイスト！」

「ノーガード」

ミサキのダメージも遊星と同じ2となった。

「私のターン！あんた凄いな、とても初めてとは思えないよ」

「そりゃ遊星は遊戯さんと同じデュエルチャンピオンだからな」

またまた十代の発言に驚かされるQ4のメンバー達。

「ますます負けたなくなっただよ。私も行くよ！半月の女神ツクヨミのスキル！デッキの上からカードを5枚めくりその中の満月の女神ツクヨミにライドできる！！」

ミサキはカードをめくるが今回はなかった。
だが手札から

「その微笑みで世界を照らせ！ライド満月の女神ツクヨミ！ツクヨミの後衛に天気お姉さんみるくをコール、さらにオラクルガーディアンワイズマン、ジェミニをコール！そしてワイズマンでジャンクウォリアーをアタック！！」

ジャンクウォリアーがドロップした。

「みるくのブースト！ツクヨミでアタック！！」

「ノーガードだ」

「ツインドライブ、ファースト…セカンド…トリガーはなし」

遊星のダメージは3になりミサキは手札にグレード3しかこなかった。

「俺のターン！俺も行かせてもらっ。デブリドラゴンをコール！」

「グレード3にライドしないか？そのままじゃツクヨミには敵わないよ？」

「俺のデッキにはグレード3はいない……」

「……えっ？」「……」

全員驚いた。グレード3がないとはほとんど勝てないのと同じだからだ。

「デッキにはいない…デッキにはな」

「まさか？」

「ああ、俺はさらにスターダストシャオロンをコール！そしてデブリドラゴンのスキル！こいつもジャンクシンクロン同様でこいつとほくずのユニット1体をソウルに送る！そして！」

「遊星のエースだ！」

遊馬はまだ見たことがないので見たくてウズウズしている。

「集いし願いが新たな星となる！光さす道となれ！！飛翔せよ、スターダストドラゴン！！」

「これが……スターダストドラゴン、遊星のエース……」

ミサキはスターダストドラゴンの美しさに見とれてしまった。

「スターダストの後衛にマッシュウオリアーをコール！そしてアタック！」

マッシュウオリアーのパワーは7000、スターダストドラゴンのパワーは10000なので17000となる。

「ノーガード」

「ツインドライブ、ファースト…セカンド…ゲット、ダブルクリティカルトリガー！効果は全てスターダストに」

ミサキのダメージが一気に5になった。

（危なかった…けど次は私が攻める！）

「私のターン！アマテラスをコール、その後ろにジェミニを！そしてツクヨミのスキル！カウンターブラスト2でデッキからカードを2枚引き、1枚をソウルに、そしてもう一度」

（これで十分）

「アマテラスでスターダストドラゴンをアタック!!」

「ノーガード、ゲットドロトリガー! 手札を1枚増やしパワーをスターダストに」

「ツクヨミでアタック!!」

「くず手のかかしでガード! 手札を1枚捨てて完全防御」

「ツインドライブ、ファースト: セカンド: ゲットクリティカルトリガー! 効果は全てワイズマンに! そしてワイズマンでアタック!」

「スターダストファントムでガード!」

スターダストファントムはクリティカルトリガーでシールドは10000。

「ターン終了」

「俺のターン! 俺はセイヴァードラゴンとチューニングサポーターをコール! セイヴァードラゴンもチューナーユニットだ!」

遊星はまたシンクロをやるつもりなのだ。

「セイヴァードラゴンとチューニングサポーターをソウルに送り、集いし星の輝きが新たな奇跡を照らし出す! 光さす道となれ!! 光来せよ! セイヴァースタードラゴン!! セイヴァースタードラゴンのスキル! ソウルにスターダストドラゴンがあるとき、パワー+1000」

セイヴァースタードラゴンの攻撃力は11000なので12000となる。

「そして手札を1枚捨て、相手のユニットと同じスキルを得る！」

「……な……!?」「……」

「サブリメイションドレイン！アマテラスのスキルをもらおう！ソウルチャージ、そしてデッキ確認！そしてスタードライブドラゴンをコール！セイヴァースタードラゴンのアタック！」

「しょこらで完全防御……！」

ミサキはこのターンを防ぎ切れればなんとかなると思っていたが覆されてしまった。

「それを待っていたんだ……！セイヴァースタードラゴンのスキル！このユニットのアタックが相手のガーディアンのスキルでヒットしなかったとき、カウンターラスト³で相手のリアガードを全て退却させる……！」

「なんだって……！」

ミサキのリアガードが全て退却してしまった。

「そしてツインドライブ！ファースト……セカンド……ゲットドロートリガー！効果はスタードライブドラゴンに！そしてスタードライブドラゴンでアタック！」

「サイキックバードでガード……」

何とか防ぎ切れたがミサキの手札にはグレード0がほとんどだった。
(ここから勝つのは辛い……………)

「セイヴァースタードラゴンはターンの終了時にエクストラデッキに戻りスターダストドラゴンとなる。ターンエンド」

「私のターン！このターンで勝つ、メテオブレイクウィザード、ココをコール！そしてアタック！」

しかし遊星はその全ての攻撃を防ぎ、ミサキのツインドライブではトリガーはこなかった。

「俺のターン！クイックシンクロン、スターライトロードをコール！そしてスターライトロードとクイックシンクロンをソウルに送り、集いし星の輝きが新たな速度の地平へ誘う！光さす道となれ！！希望の力フォーミュラシンクロン！」

「遊星、このターンで決めるな」
遊戯はファイトの終わりを悟り、權も同じく感じていた。

「フォーミュラシンクロンのスキル！ヴァンガードがスターダストドラゴンのとき、このユニットをソウルに送り、集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く！光さす道となれ！！アクセルシンクロ！生来せよ！シューティングスタードラゴン！！」

どうやらこの世界にきて遊星はクリアマインドを発動しなくてもシューティングスターを出せるようになったようだ。

「シューティングスタードラゴンのスキル！カウンターブラスト2

でデッキの上からカードを5枚めぐりその中のチューナーユニットの数だけアタックがヒットしたときスタンドできる！！だがツインドライブは失うけどな」

そついいながら遊星はカードをめくる。

「デッキよ……………答えてくれ！……………来た！」

遊星がめくったカードは全てがチューナーユニットだった。

（一方的じゃない……………）

ミサキは軽く絶望する。

「シューティングスタードラゴンでアタック！！スターダストミラージュ！！」

シューティングスタードラゴンの攻撃力は11000、マッシュウオリアーのブーストを受けてパワーは18000。

「ビクトリーメイカー、ばにらではガード！」

（これでトリガーが来なければ！）

「ドライブチェック、ゲットクリティカルトリガー！スタードライブブドラゴンにパワー+5000！そしてアタック！」

結局ミサキは遊星のアタックを防ぎ切れず負けてしまったのだった。

「戸倉なかなか面白かった、またファイトをしよう」

「次は負けないからな……」

遊星とミサキは再戦の約束をして後の二人に場を渡すのだった。

星の絆VS占術魔法団（後書き）

次は遊馬VSカムイです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2376z/>

カードファイトヴァンガード～イメージと絆を繋ぐ物語～

2011年12月19日19時51分発行